

下野国一之宮・室の八嶋 探訪の旅

<1> いざ下野国へ

2024年4月2日、八千代台駅からモーニングライナーで日暮里へ。平日の朝の通勤時間帯は、混雑した電車を避けてこの手段を用いることが多い。日暮里から京浜東北線で赤羽へ。左側の車窓に続く断崖の地形を眺めているうちに王子まで来てしまった。飛鳥山には花見のボンボリが連なっているのが見えた。

赤羽で9時27分発の宇都宮行に乗り換えて一息ついていたら、どうも停車駅が少ないような気がする。快速電車だったので東武線に乗り換える栗橋駅には停車しない。やむなく久喜で下車して、先着後発の10時02分発各駅停車古河行に乗り換え、10時11分に栗橋駅に到着。

東武宇都宮線はローカル線なので、思い通りに走ってはいない。ローカル線の旅には、「待つことを楽しむ心」が大事。東武線のホームから、通過電車を眺めたり構内の保守用車両の動きを眺めたりして時間を楽しんだ。東武宇都宮行は10時50分発。走っている時間よりも待っている時間の方が長いなんて思っただけではない。

新栃木駅に11時25分着。東口から出る「ふれあいバス大宮・国府線」の乗り場を確認してから昼食。この駅は東口にはロータリーがあるだけで何もなし。西口に数軒店があるだけで、それもいつでも開いているわけではないということを知ったので、迷うことなく西口の駅前通へ移動。

西口として大規模店舗があるわけではなく、住宅街のような趣の中に駅前ロータリーから伸びる真っ直ぐの道を歩いて数分、二軒だけの食堂が隣り合わせて並ぶ所へ。

前は「カリン」と看板が下がっているお店に入ったが今日はまだ「営業中」の札が出ていないので、左隣の「食堂」と描いた暖簾が下がる店に入ってみた。野菜ラーメンを注文してテレビのニュースに耳を傾けていたら、東北新幹線が工事の不手際により終日運行不可能であることを報じていた。

<2> 室の八嶋をめざして

東口のロータリーから出る「ふれあいバス大宮・国府線」は、ローカル・ミニバスで12時34分発。

200円運賃を払って車内放送に耳を傾けていたら「ふれあいバスおおみや・こうせん」と言っていることに気がつき、国府は「こう」と読むことがわかった。下車予定の「国府郵便局前(こうゆうびんきょくまえ)」のアナウンスを聞き落とさずに済んだ。どこの町のミニバスも同じだが、あちらこちらを丁寧に細かく曲って走るので、よそ者にはわかりにくい。栃木市では「ふれあいバス」と称するミニバスを数多くの路線で走らせており、予め知っていると大変便利だ。スーパーマーケットや公共施設では玄関口まで入って停車してくれるし、国道のような大きな道路以外の場所では、乗客が求めた場所で乗降が可能なので、特に老人や体が不自由な方にはありがたい存在になっている。どこの停留所でも、下車したお客さんが発車しようとしているバスに向かって路傍から深々と頭を下げて感謝の意を表わしているのが印象的だった。

「次は国府郵便局前です」のアナウンスを受けて下車合図のボタンを押したら、運転手から問いかけが返ってきた。「止まる場所はバス停でよろしいですか？」

下車する時に「ありがとうございました」と深々と頭を下げた。この町の住人になれたような気がした。

郵便局の前に立ち、磁石を出して方角を確認し、地図を広げてめざす「室の八嶋」への道を確認した。

北東に向かうバスと分れて南東に向かう道の角には「室の八嶋 大神神社(むろのやしま おおみわじんじゃ)」と描いた看板が立ち、矢印が導いてくれた。やや細めの道に入って行くと、正面に木立と大きな鳥居が見えてきた。鳥居は西参道(裏参道)入口なので、脇から南へ大きく回り込み表参道から入ることにした。

<3> 室の八嶋・大神神社(おおみわじんじゃ)とは

左右に並ぶ朱色の灯籠の列が参詣者を迎えてくれる。境内に入ると真新しい碑文が待ちかまえていた。

「孝謙天皇の信の厚かった道鏡が、天皇の崩御間もない宝亀元年(770年)に下野薬師寺の別当として赴任した折り、この地(室の八嶋=神領)に長く住んでいた」ことがしたためられていた。神社のなりたちとは関係なく、

「道鏡という人が居た」ということを知らせるだけのものだった。下野薬師寺は、天武天皇の御代白鳳8年(680年)に、天皇の勅願によって建てられた寺で、皇后(のちの持統天皇)の病の平癒を祈願したものだ。のちに暦応2年(1339年)に足利尊氏によって安国寺と改称されたが、平成30年(2018年)に元の名に戻った。大神神社誕生の経緯は、別な説明板に記されていた。

第十代崇神天皇48年(3世紀後半から4世紀前半)に、皇子である豊城入彦命(とよきいりひこのみこと)が東国平定の折りに、戦勝と人心平安を祈願して、広く名の知られていた室の八嶋に、大和国の一之宮三輪山の大三輪大明神を勧請して大神神社を創建したと伝えられている。つまり「大神神社が成立する前に室の八嶋が存在していた」ということになる。

康保4年(967年)に定められた延喜式には、「大神神社(おおみわじんじゃ)」として下野国の三つの神社の一番に記されており、祭神は大物主命と記されているとのこと。

境内の水の流れに八つの嶋を配してそれぞれの嶋に神を祀ったのが「室の八嶋」。

祀られた神は入口から順に、筑波神社・天満宮(太宰府)・鹿島神宮・雷電神社・富士浅間神社・熊野神社そして太鼓橋を渡って二荒山神社・香取神社。出口の鳥居を潜ると水琴窟もある。

「奥の細道」の中で「曾良が聞かせてくれた話」として書き記されているが、この神社にはもうひとつの神として「此花咲耶姫」も祀られており、「八嶋」のひとつに富士浅間神社が祀られている。曾良の言葉を借りるなら、「富士山も一体のもの」と言うことが出来る。

瓊瓊杵尊(ににぎのみこと)の妻となった此花咲耶姫が一夜のちぎりで懐妊したのを疑われたので、四面を土で固められた出入口のない部屋(無戸室=うつむろ)に入り、「もし他の神の子であるならば焼け死んでしまうでしょう」と言って火を放った。この火の中で生まれたのが彦火火出見尊(ひこほほでみのみこと)で、八嶋の神(八嶋大明神)となったと、日本書紀に書かれているとのこと。

この言い伝えを元に、「室の八嶋は煙が上がる所」と言われてきた結果、「室の八嶋」は「煙立つ(けぶりたつ)」の歌枕としても使われ多くの歌人によって詠まれた。

ながぶればさびしくもあるか煙たつ室の八嶋の雪の下もえ 源実朝

しかしこれは、野中の清水から立ち上がる水気(水蒸気)で、煙ではなかったということについて、曾良随行日記の「名勝備忘録」にも記されていた。

煙かとおろのやしまを見しほどにやがても空のかすみなるかも

五月雨に室のやしまを見渡せば煙は波の上よりぞたつ

さらにこの地には、このしろ(コハダ)を焼く臭いは人が焼かれる臭いと似ていることから、「このしろは食べてはならぬ」という言い伝えもあるという。

<4> 下野国の歴史 次はどこへ

大神神社の南方 3km程の所には下野国府があった(らしい)。その東側 3Km ほどの思川の対岸には下野国分寺跡もある。また思川と姿川に挟まれた一帯には無数の古墳が存在する。

「野州大塚」という地名も「古墳(塚)」があったことを示すものと考えられる。

また、地図上を指先でなぞりながら川の流れを読み取ってみると、兜川と鎧川が合流して姿川になる。姿川は思川と合流して、渡良瀬川になり利根川に合する。川の名前を見ただけでも味わいがある面白い。

神社を西参道から出て、帰り道は東武線の野州大塚駅まで歩いてみた。

下野国の中枢機能がこのあたりに集結していたと考えられる奥深い土地だが、駅までの道沿いにはさしたる遺跡は存在しなかったし、どちらかと言えば西暦2000年代風のモダンな一戸建て住宅が建ち並ぶ町だった。

帰りは両毛線に乗りたいと思い、栃木駅で東武線を下りてJRに乗り換えた。思川の流れとその流域に点在する古墳群の風景を車窓から見たかったが、さほど大きい古墳ではないせいか走る車窓からの確認は無理だった。姿川と思川、二つの流れに沿って古代の歴史を遡る「何か」が見られそうな町を探るのは、次の機会に回すことにして、小山駅から上野に向かった。

<5> あとがき

松尾芭蕉の「奥の細道」は気になる存在であり続けた。いくつ(何歳)になっても、突如として読んで見たくなる
ことがある作品だ。

2021年の夏、松尾芭蕉が歩いたコースを地図上で確認してみたくなり、ロードマップと国土地理院地形図とを
手元に置いて、「奥の細道」と「曾良随行日記」を読み始めてみた。数頁も進まぬうちに次のアイデアが浮上し
てきた。「奥の細道」の文章どおりに、現在の地図で実際に旅を試してみたらどうなるか……。

初日は、深川から舟で千住大橋まで行き、ここで陸に上がって歩き始めて、草加を抜けて春日部まで 29Km。
二日目は栗橋で利根川を渡って間々田まで 35Km。三日目は栃木・壬生・鹿沼を経て文挟まで 48Kmと、その
健脚ぶりに驚いた。

そして、福島県から宮城県に入るところまで地図上でのトレースが進んだが、面白すぎて深みにはまり、他のこと
ができなくなってしまいそうなので、一旦中断することにした。

松尾芭蕉は、千住を出てから三日目に「室の八嶋」に立ち寄った。曾良の記録を見ると、「この日は間々田を出
発して小山から西へ進み、飯塚を経て小倉川(現在の姿川)を渡り、惣社河岸(現在の思川と黒川の合流地点
あたり)で渡船して室の八嶋に辿り着いた」ことがわかる。

わざわざ立ち寄ってみたいと思った「室の八嶋」とはどんなところなのだろうと気になったことがきっかけで、今
回の旅を思いついた。

曾良が随行日記に書き残した「俳諧書留」によると、芭蕉はここで二句を残している。

系遊におすびつきたるけぶりかな
あなたふと木の下暗も日の光

*註①:系遊(いとゆう)＝「かげろう」のこと

*註②:あなたふと＝あな尊い(これはまあ尊いこと!!)

このあと日光での句作「あらたふと青葉若葉の日の光」につながる句。
「あらたふと」「あなたふと」という言葉の試用ではないかと言われている。

